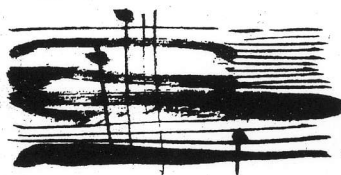


展 望



山元 眞

子どもを取り巻く環境

昨今の子どもを取り巻く環境は、非常に厳しいものがある。一連の子ども命にかかわる事件については、その原因などについて多方面から議論されているが、この現実を消すことはできないし、また、この事実から逃げることもできない。真正面から受け止め、その悲しみを心から味わい、ごまかしてはならない。今まで以上に真剣に、そして、すべ

ての人が、特に大人が反省しなければならぬと思う。命が粗末に、軽んじられる世界を作ってきたのは、まぎれもない大人なのだから。

厳しくすればいいのか

しつこく厳しくすればいい、と考える人がいる。罪の重さに応じて、もっと罰を重くすればいい、と考える人がいる。甘やかしてはいけない、と考える人がいる。「目には目を、歯には歯を」

と考える人がいる。しかし、このような考

え方が、また、新たな悲劇を生んでいるとは考えられないだろうか。これら悲惨な出来事の根底にあるのは「愛の欠如」とは言えないだろうか。悪のあるところからは悪が生まれ、愛がないところからは、愛は生まれない。愛のないところから悪は生まれてくるのである。自分を顧みることとはせず、子どもに対峙(たいし)しても、子どもの立場で考えることは

しない。子どもたちが、どんなに愛に飢え、それを求めているか、それをおぼえずに、ただ子どもだけを、また、その家族だけを責める。もっと、厳しくしなければと、いきりたつほど子どもたちを孤独に追い込んでいく。子どもたちは、もっと愛を、優しさを、自由を、平和を求めている。

つながりが力になる

愛は「つながり」でもある。つな

しつこくは厳しさ？ 優しさ？

がっているとき、人は愛を感じる。最近、若者たちに元気が出てきた。生き生きとしてきた。彼らは、つながっている。電子メールやインター

ネットが彼らをつないでいる。善きにつけ、悪しきにつけ、このつながりは大人が考えている以上に強い。互いにメールアドレスを交換し、自分でホームページを作って情報交換をしている。メールは他者が読むこ

とはできないが、ホームページは第三者も見ることが出来る。教会の中高生や青年たちが情報を交換しているのを見ると、そのエネルギーに感心する。まじめで、素直で、希望がわいてくるほどである。たとえば、戦争や平和についての彼らの考えには芯があり、純粋で力がある。平和を考える集いがあれば、それについての情報を提供し、一緒に参加しようと呼び掛ける。そして、それに応

える若者がいる。ボランティアの気持ちも純粋。そこには大人が考えているような「打算」はみじんもない。

厳しさではなく、愛を

愛は、時として厳しさを求める。愛から出る厳しさは実りをもたらすが、愛のない厳しさは、人を卑屈にするだけである。優しさは、放任することでもなく、また、自由気ままを許すことでもない。優しさは相手

とかかわり、相手を認め、尊敬し、受け入れることである。このような心で子どもたちや若者に接するならば、そこから豊かな実りが生まれてくる。肯定するのではなく、否定する姿勢で彼らに接するならば、彼らは行き場を無くしてしまうだろう。そして、彼らは子どもとして、若者として、死んでしまっただろう。

電子メールやインターネットは時と場所を軽く超えて人と人を結び付ける。何事も教区や小教区という区域に、しかも何十年も前に区分けされた地域にとどめてもこたわる人にとっては、おそらく考えられない世界なのかも知れない。若者が教会にこない、教会から離れているといわれているが、それは教会サイドの一方的な見方ではないか。今は、つながり方が昔とは違う。教会もメールやインターネットで若者をつながらせてもらってはどうかだろうか。きっと、社会も教会も今よりもっと生き生きしてきていると思うのだが…。

(福岡教区司祭)